

「象の絵画」

— 2 稿 —

2025/5/27

作者名 さいの

へ人物表へ

藤崎 陽 ふじさき よう (14) 中学二年生

藤崎 木子 ふじさき きこ (46) 陽の母

藤崎 大史 ふじさき たいし (54) 陽の父

藤崎 翔 ふじさき しょう (17) 陽の兄 高校三年生

川向 健二郎 かわむかい けんじろう (14) 陽の同級生

大山 修 おおやま おさむ (73) 藤崎家のアパートの近くに住む老人

1. スーパーマーケット・控え室（夜）

従業員が着替えや休憩をするための小さな控え室。
藤崎陽（14）、制服姿で俯き加減で座っている。

陽 「……」

机の上には、チューイングガムが二、三個。
陽の向かいにはスーパーマーケットの店長。

2. スーパーマーケット・控え室の前（夜）

急いで歩いてきた藤崎木子（46）、控え室のドア
の前で立ち止まる。
軽く息を整えてから、ノックして、ドアを開ける。

3. スーパーマーケット・控え室（夜）

木子、控え室に入ってくるなり、店長に向かって腰
を曲げ、深々と頭を下げる。
陽、木子をじっと見ている。

4. アパートの外階段・二階と三階の間（夜）

階段をゆっくり登る木子と、その後ろに、陽。

木子 「……お兄ちゃんには言わないでね」

陽 「……」

歩きながら陽、階下の大きな一軒家が目に入る。

木子「今、余裕ないと思うから。変な意味じゃないよ」

リビングの引き違い窓が大きく開かれていて、電気
が付いたまま中の様子が丸見え。

大山修（73）がソファに座ったまま、いびきをか
いて眠っている。テレビの音声が漏れ聞こえる。

ソファの後ろの壁に掛けられた額縁入りの象の絵画。
陽、その様子を見ている。

木子 「ね？」

陽 「……うん」

5. 藤崎家・リビング（夜）

集合住宅のこぢんまりとしたリビング。

藤崎大史（54）、四人掛けのテーブルに座り、ビール片手にテレビを見ている。

その向かいで制服姿の藤崎翔（17）、英単語帳を見ながら黙々とハンバーガーを食べている。帰ってきた木子と陽、リビングに入る。

木子、翔を見て少し驚いていて、

木子 「え？ なんで？」

大史 「……今日は家で勉強する気分なんだって」

翔、木子に一瞥もくれず、食べ続ける。

木子 「お弁当は？」

大史 「いいじゃん食べたいって言うんだから」

木子 「もったいない」

大史 「おい」

と、リモコンでテレビの電源を切る。

大史 「（陽に）馬鹿か」

陽、大史から目を逸らす。木子、取り繕って、

木子 「ねえ、今じゃなくても」

大史 「恥ずかしい。小遣いやってないみたいに思われるだろ」

木子 「ねえ」

大史 「さっきもう全部話したよ」

木子 「……」

大史 「馬鹿馬鹿しい。何が気に入らないか知らねえけど、たかだかこんな数百円のことで」

食べ終えた様子の翔、席を立つ。

大史 「お前、自分でその程度の価値の人間だって言ってるようなもんだろ」

陽、不貞腐れた顔で大史を見ている。

大史、陽に説教することを諦めて、

大史 「情けない」

と、再びテレビを付ける。

陽、リビングを去る。

6. 学習塾・外観（夜）

雑居ビルの一フロアに入っている小さな学習塾。

7. 学習塾・教室（夜）

授業が始まる前の塾の教室。生徒はまばら。

後方の席に座って陽、虚空を見つめている。

そこに川向健二郎（14）、急いでやってきて陽の前に座る。何やら興奮気味。

陽 「……？」

健二郎、制服の内ポケットから小さな駄菓子を何個か、一つずつ取り出して陽の机に置いていく。
最後、とっておきと言わんばかり、ポケットから二人で分けて食べるタイプのアイスを取り出す。

健二郎 「全部で、358円」

陽、アイスを取り出し、半分を手取る。

陽 「アイスじゃん」

健二郎 「ちょうど店員見てなくてさ」

陽 「今やったってこと？」

健二郎 「（小声で）下のコンビニ」

と、残り半分のアイスを食べる。

健二郎 「これでハイスコア更新ね。358円。陽ちゃん、これでいいでしょ。俺の罰ゲーム無しね。告白」

陽 「あ、高松？」

健二郎 「しっ」

健二郎、教室内の一人の女子の方をチラッと見る。

陽 「……俺昨日、598円」

健二郎、動揺して、

健二郎 「え？ 陽ちゃん、昨日その、バレたんですよ。それは流石に、ノーカンじゃね」

陽 「こっちはバレてない」

と、カバンから箱入りの食玩を取り出す。

健二郎 「うわ。でか」

健二郎、食玩を持って、内ポケットにしまおうとするが、入らない。

健二郎「全然入んないじゃん」

陽、食玩を持って、パッと手を離す。
床に置かれた陽のカバンに入る。

健二郎「……陽ちゃん、どこまで行っちゃうのよ」

陽「くだらねえよ、こんなの」

と、アイスを頬張る。

健二郎「？」

陽「……あのさ、絵画って、いくらぐらいすると思う」

健二郎「は？ カイ、ガ？」

陽「絵だよ、絵。ゲージュツ品の？」

健二郎「なんの絵？」

陽「象」

8. アパートの外階段・二階と三階の間（夜）

昨夜同様、大山邸のリビングの引き違い窓が大きく開かれていて、中で大山がソファに座って眠っているのが丸見え。いびき声とテレビの音。

陽と健二郎、その様子を階段の上から見ている。

健二郎「（小声で）マジで全然起きねえじゃん」

陽「（指差して）あれ」

壁に掛けられた額縁入りの象の絵画。

9. 大山邸の裏の通り・生垣の前（夜）

裏路地の細い通りに面した、大山邸の裏庭を囲んでいる生垣。手入れされておらず枯れ放題で、通りからは中の様子が丸見え。

陽と健二郎、生垣越しにリビングの様子を覗き込んでいる。寝ている大山の姿。

生垣には、一人なら通り抜けられるくらいの隙間がぽっかりと空いている。陽、生垣の隙間を縫って、中に入ろうとしていて、

健二郎「（小声で）陽ちゃん、マジで？」

健二郎、陽を追うが、生垣の前で躊躇して、止まる。

10. 大山邸・敷地内・裏庭（夜）

陽、生垣を抜けて敷地内の裏庭に入り、ゆっくり進む。花壇を踏み潰しているが、気付かない。

陽、縁側に上がり開けっぱなしの窓に手を掛ける。

陽の目と鼻の先には、大山。

大山 「（いびきをかいている）……」

陽、リビングに足を踏み入れようとして、止まる。

陽の靴に黒い土が付いている。

陽、立ったままそっと縁側に脱ぎ捨てる。

11. 大山邸の裏の通り・生垣の前（夜）

健二郎、生垣の隙間から陽の様子を覗き込んでいる。ふと、自転車一台近づいてくるのが見える。

健二郎、必死の身振り手振りで陽に伝えようとして、

健二郎「（小声で）陽ちゃん、陽ちゃん」

忍び足でリビングに侵入する陽の後ろ姿。

12. 大山邸・リビング（夜）

陽、靴下のままりビングに侵入し、中を見回す。二十畳は優にあらうかという広いリビング。

大山の眠るソファ。窓から見えていたのは一部で、

五、六人掛けの大きなものであることが分かる。

他に大きなテレビやシャンデリア、観葉植物など。

陽 「（呆気にと取られて）……」

陽、大山の眠るソファと後ろの壁の間に入り、掛けられた絵画に両手で触る。なかなか外れない。

13. 大山邸の裏の通り・生垣の前（夜）

自転車がつっくりと生垣の前へとやってくる。

健二郎、どうにかやり過ごそうとして咄嗟に顔を背

け、祈るような表情でじっと固まる。

自転車に乗った男性、近くに来るまで健二郎に気づ

かず、ぶつかりそうになる。はっと気づいて、咄嗟

にハンドルを切り、通り過ぎる。

男性「あぶねえぞ！」

と、数回ベルを鳴らす。

14. 大山邸・リビング（夜）

陽、外を振り向く。

×

×

×

大山、目を開ける。

寝ぼけ眼のまま、立ち上がる。

窓の外の様子を見るが、何も気付かない。靴は縁側に置かれたまま。

再びソファに座り、眠りにつく。

その頭上、壁にあった象の絵画が取り外されている。

15. 大山邸・敷地内・裏庭（夜）

陽、裏庭の物陰に隠れて、息を殺している。
手には象の絵画。

（終わり）